

28建大崩壊の悲劇

七ヶ年にわたる建大生活も、私においては特記すべきものは意外にも乏しく、やがてそれは崩壊を迎えるのである。ところで、それに先立って私は、朝鮮への出張を命ぜられたのである。そしてその用務は、明年度の学生募集であったが、その出張の旅先にて私は建大の、いや、満洲国の、いやいや、祖国たる日本自身の敗戦の報を知ったのである。そしてそれは忘れもせぬ昭和二十年の八月十四日の夜であった。私はその日平壤の駅前はかなりりっぱなホテルに宿っていて、おりから同宿の韓国人のある鉦山王と知り合ったが、さすがに、二、三の鉦山を所有している人だけあって、人品骨柄は鉦山主として相応しい人であった。そしてその人より祖国敗戦の報をその夜知らされ、明日の正午天皇自身の玉音放送の旨まで知らされ、さらに氏は「自分は明日南鮮の故里に帰るゆえ、何なら同行したらどうか。そして静かに帰国の機を待たれては如何」とまで言われたのであった。されど私は家族を新京に置いており、かつ帰学して報告せねば…とあって、氏の懇情を感謝したのであった。

さて、翌八月十五日の正午の玉音放送を聞いたが、雑音が多くして聞きとり難かったが、了るや直ちにホテルを出でて駅へと急げば、日本の敗戦を知った民衆はすでに半ば暴動状態であった。しかし切符が入手できたのはむしろ不思議な感じがした。そしてそれより奉天まで途中幾十回となく長時間停車しつつ、幾日か掛かってやがて奉天着。そして私は下車して、北大宮にて勤労奉仕中の長男を訪ねて、一緒に帰宅しようと奨めたが、友人を置いて自分一人帰れぬと言ったので、そのまま置いて帰る。それより幾時間かかったか忘れたが、とにかく自宅に帰れば、すでに家族たちは、親族の一人が軍の乙種工業学校の校長であったが、何れも未成年とて軍が特別列車を仕立てて疎開したのに誘われて同行したことにて官舎には居らず、官舎にはすでに同僚中シベリア送りになった遺族たちが残って居た。かくてソ連軍は、私より数日前よりすでに新京に入り、ために建大などは瞬時にして崩壊したわけである。そこで私は同僚の家族たちと同居し、そこへ案じていた長男も奉天より帰って来たので、私はすることがないので、久しぶりに読書三昧の身となった。が、やがて或る人の密告により、私ら建大教官の一部が突如ソ連軍に拘禁せられたのである。

(副総長更迭後の教官陣の内紛の項参照)

かくて収容せられること数日後、一同はすべてシベリアへ送られたが、私一人はそれを免れた。訳は、ソ連の最高検察長官の通訳が、たまたま建大時代の白系露人の一人であって、その君の懇情によりて、私はシベリア送りであったところを特に釈放されたのである。正式の宣告文ではシベリア送りであったが、特赦によって赦す旨を、声を一段低めて「先生、こうした動乱の中ですが、どうぞ御研究を続けられんことを !!」との一言によって判

ったのであった。それにしても、恩を仇で返すとの例は多けれど、私の如く仇を恩もて返されたのはほとんど絶無であろう。それにしてももしあの際シベリアへ送られれば、かの地にて死に、到底今日の私はあるべくもなきことを思えば、凡てが…少なくとも私にとっては、「神天」の御導きと言わずして何ぞ!!